

「今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ」について

4 ページから「地方創生が目指す社会」について記載があり、その中で「産業・社会こそが知識集約型にシフトしつつあり…都市ではなく地域が産業の拠点となる可能性が高まるとも言える」と述べられている。

これは産業の拠点となることが、都市部だけではなく「地方でも可能」ということを示唆するものだが、地方創生は、「地方でこそ可能」なことを目指さなければ現実のものとならない。

同じ文章の中に「第三次産業間でもデータ活用による高付加価値が進むことによって、全国各地において地方のポテンシャルを引き出すことが期待される(意味不明)」とあるが、これは既存の産業から地方創生をイメージしたものである。しかし、地方に必要なものは、新しい価値の創造であり、そのキーワードのひとつは「文化・伝統」だ。文化や伝統は守るもの、保存するものではなく、その価値を発展させ、そこに新しい可能性を作ってこそ意味がある。そこから生まれる日本人としての感性がなければ、AI、ソフト開発など、クリエイティブな仕事もいずれ世界と戦うのには伍して限界が来る。

その意味で、新しいSGHにリージョナル型が設けられたことは意味が深い。応募要件には、「地方の課題を世界の視点で解決する」といった項目が加えられると聞いているので、ぜひ「地域の資源を世界の視点で発掘し、磨いて、世界に発信する」という要件も加えてもらいたい。それによって、高校段階から、地域が守ってきた文化や伝統にどう新しい息吹を加えられるかを考えることになる。それが小さな地方創生につながり、やがて日本のグローバル化に大きな影響を与えることになることを期待する。